

不易流行

埼玉病院
看護部長
関 則子

私が勤務している埼玉病院は、2020年までに200床増床という大きな計画が実施されている真只中です。この計画は第6次埼玉県地域保健医療計画に基づき、2013年に計画が発表されました。計画から5年の月日が経ち、ようやく2018年9月に新館が完成し、11月には新館に一部診療機能を移して診療が開始されました。その一方で、本館では改修工事が行われ、この間、改修に伴う騒音対策等もあり、新館・本館で引越しが続き、当病院の看護師達は病棟引越しのプロとなりました。

時代は「平成」から「令和」になり、2019年6月をもってようやく本館の改修工事も終わり、550床に向け本格稼働となります。広い廊下とゆったりとした病室、そして、各科の特徴が多く見られる病院になりました。また、病院の建物だけでなく、緑地や駐車場など病院内の敷地も整備が進んでいます。今まで残っていた昭和の時代に築かれた建物は撤去され、昭和から続く風景は櫟と銀杏の並木道だけになりました。「昭和」から「令和」までの3世代で大きく様変わりしました。30年前を知る私としては、淋しいような、嬉しいような複雑な気持ちです。

私は昨年当院に赴任致しましたが、その日々は怒濤の1年でした。今振り返っても、毎日をどのように過ごしてきたのか思い出するのが難しいこともあります。新館・本館の新築および改修計画の会議や打

ち合わせでは、設計図からいろいろ想像して完成形にして行きましたが、出来てみると印象が違ったり、不具合などもあったりしました。そんなことも、今は思い出になっていることも多々あります。そんな過程もこの時期に、この場所にいることが出来たからこそであると思います。

病院の新館が建ったことで、建物だけでなく人との出会いについてもこの場所での関わりを感じています。それは、地域の方、患者さん、ここで働いた経験のある方などさまざまな方からお声をかけていただく機会が増えております。特に当院で働いた経験のある方々からは、励ましや当院の未来に期待する言葉をいただきます。歴史ある病院であり、特に看護については、脈々と受け継がれてきた看護に対する思を次世代につなぐ役目があり、当院で働いたことを誇れる人材の育成に心して取り組まなければならないと身を引き締めています。皆様からの言葉を励みに、いつまでも変わらない看護の本質を忘れず、新しい時代の変化に合わせた考えや方法を取り入れた看護が実践できる環境を整えていきたいと考えています。看護も「不易流行」と言う考え方を意識しながら、今の状況を楽しみ、当院が掲げるコンセプトである「地域への未来責任」を果たしたいと思っています。